

研究の動向

■ 家政学の視点から捉えた保育室環境

— 3歳未満児の保育環境に関する保育者への調査結果と保育実践から考える — 明星大学 齋藤 政子

1. はじめに一各国の「保育」へのまなざし

近年、先進諸国では、乳幼児期からの発達保障の重要性や、貧困と教育上の不利益への取り組みに対して認識が広がり、「保育」^{*1}に対する関心が高まっている。「保育」はいまや、単なる女性の労働市場の拡大に対応するためのものではなく、「子どもや親、社会全体に広範囲の恩恵をもたらす」(OECD 2012=2019, 15)ものであるという認識が広がっている。

たとえば、OECDでは、“Starting Strong”(人生の始まりこそ力強く)をスローガンとして、「保育」つまり乳幼児期の教育とケア(Early Childhood Education and Care以下ECECと略す)に関する国際比較調査が実施され、世界の保育政策へ提言(OECD 2001; 2004; 2006=2011; 2012=2019; 2012=2019, 15)を行ってきた。近年では、ECECの「供給・準備をすることは、各国の政策課題に着実に根を下ろし」(OECD 2006=2011, 17)しており、公共財(public good)として、「保育」の質を高めることが重要だという認識でも一致している。

1990年代、OECD教育部門は、「グローバルな人材移動や人的資源開発の動向把握のための国際教育指標開発に着手していた」が、高等教育や義務教育等のアウトカム(成果)に調査の主流があり、乳幼児期の保育については未着手だった(一見 2016, 120)。しかし、脳神経科学の飛躍的進展の中で、乳幼児期に注目が集まり、ユネスコ・ユニセフやOECDは、1990年代後半以降、「幼い子供の権利実現という人道的見地からであれ、グローバル時代の持続可能な経済開発戦略からであれ」(一見 2016, 121)、乳幼児期への取り組みを重視し始めたのである。

また、別の側面からも「保育」は注目されている。2015年9月には、国連サミットで、「持続可能な開発のための2030年アジェンダ」が全会一致で採択された。これは、1992年の国連地球サミットや、「国連ESDの10年：2005～2014」などの取り組みが土台となっていることは言うまでもない。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、すべてのステークホルダーが役割を持って統合的に取り組む17の目標(SDGs)^{*2}の中には、目標4に「教育」も設定された。人類が地球規模で平和な社会を築いていくためには、「教育」の果たす役割は大きく、とりわけ、すべての子どもたちが健康で質の高い保育を受けることは母親たちの生活向上やジェンダー平等にもつながることから、「保育の質」向上のための取り組みが注目されている。

しかしながら、日本の就学前教育への公的支出割合は、2019年9月10日にOECD(経済協力開発機構)が発表した報告書「図表でみる教育2019年版」(OECD 2019a)によると、前回の調査に引き続き依然として低くOECD加盟国平均の三分の一程度であった。初等教育から高等教育までの公的支出が国内総生産(GDP)に占める割合も、日本が2.9%と、35か国中最下位であることが明らかとなった^{*3}。日本では、「第2期教育振興基本計画」(2013～2017年)において、保育・幼児教育の無償化案が明示され、2019年10月から実施されているため、それが算入されれば公的支出の対GDP比は今後上昇することが見込まれる。しかし、労働条件が最適化している場合は、「提供される保育の質」や「子どもへの成果」が改善されること(OECD 2012=2019, 168)や、保育者一人当たりの乳児の割合が低い方が乳児には有益であること(De Schipper et al. 2006)、さらにイギリスの大規模調査からは、資格レベルの低いスタッフが多い施設では「子どもの社会情動的な成果が好ましくない傾向にあること」(Siraji-Blatchford 2010)なども明らかとなっている。公的財政投入の費用対効果は、「保育」では「子どもの豊かな育ち」という「成果」にかかってくるが、その「保育」

Masako SAITO

明星大学教育学部教育学科 教授
博士(教育学)

〔著者紹介〕(略歴) 静岡大学大学院教育学研究科家政教育専攻修了。
臨床発達心理士。

〔専門分野〕 児童発達学、保育学。

の質を下支えする人的物的環境の改善への財政的支援も重要であろう。我が国の今後の課題は「量の拡充」だけではなく「質の向上」であるといえるだろう。

ところで、日本では、3～5歳児の幼児教育在籍率はOECD各国の平均（87%）よりも高く、2017年度では91%であるのに比べ、3歳未満児の保育・幼児教育在籍率は30%と、OECDの平均（36%）（OECD 2019b）よりも低い。ただ、この数字は、2005年の16%からみれば増加しているの、育児環境改善を図る取り組みは、わずかながら効果を示し始めているといえる。しかしながら、3歳未満児保育は、親の仕事と家庭の両立支援や乳幼児の発達保障の双方に大きな影響を与えることがわかっている一方、特に歩き出して子ども同士のトラブルも出現し始める1、2歳児の保育については構造上の困難も指摘されており（古賀 2011, 18）、3歳未満児の保育環境を検討することは喫緊の課題である*4。

そこで、本稿では、3歳未満児の保育環境、特に1、2歳児保育における保育室環境に関する調査結果の分析やその発達の意義などについて、私見を述べつつ報告したい。

2. 家政学・家庭科と保育室環境

家政学と保育室環境とはどう関係するのだろうか。

日本家政学会のホームページには、「日本家政学会は、家政学に関する研究の進歩と発展を図り、人間生活の充実と向上に寄与する」目的で設立された学術団体と明記されている。そして、家庭生活は社会の様々な問題と密接に関連しており、問題解決には、「家族や個人の生活を、時間的奥行きを持つライフスタイルの中で捉える視点が不可欠」であり、「生活を、社会を、地球を、経済原理ではなく生活原理に基づいて考え、生活者の側から見据えることが大切」だと述べられている（傍線筆者）。

保育室環境とは、乳幼児の保育環境であるが、ただ単に一時を過ごす場所ではない。乳幼児が、食事をし、遊び、くつろぐ空間であり、生活する場である。乳幼児は生活者として、保育室環境の中で、日々暮らしており、生活者である乳幼児の視点から保育室環境を考え、よりよくしていくことが、乳幼児の育ちや生活の質の向上を考えるうえで重要なのである。

さらに、家庭科は、「人間が本来持っている成長・発達する力を引き出し、生活をつくる力として育む教科」*5（渡辺 1999, 11）である。そして、伊藤（2019, 52）の述べるように、家庭科はこれまでの国民教育の中で「生活の基本的知識・スキル」や「生活（伝統）文化の継承」だけでなく、「自立の支援・促進」という大きな役割を担ってきた。荒井（2005, 51）は、青年期の発達課題に照らし、四つの学習課題を設定している。第一に「生活

を自立的に営む」、第二に「生活に主体的にかかわる」、第三に「平等な関係を築きともに生きる」、第四に「生活を楽しむ味を創る」である。こうした学習課題や目標については、家庭科教育の研究者の中でも議論が続けられてきた。近年では、日本家庭科教育学会（2019, 60）は、家庭科教育で重視すべき4つの視点として、視点1「生活の科学的認識」、視点2「生活に関わる技能・技術の習得」、視点3「他者との協力、協働、共生」、視点4「未来を見通した設計」の四つをあげている。

これらの学習課題や視点からみると、乳幼児は、おとなが作り出す「生活」の中でおとなや他の子どもと共に生きている存在であって、「自立的に営む」ことはできず、認識や技能・技術、設計力の育ちについては萌芽が見えるにすぎない時期だと思われるかもしれない。しかし、「生活」は、紛れもなく乳幼児自身にとって発達の源泉であり、乳幼児は着実にその「生活」の中で人間としての能力－認識力や技能・技術、思考力など－を育てている。「生活」は、乳幼児にとっても「眼前に迫る対象的事実としての現実であると同時に、人間自身による自己の内外を切り結ぶ相互交渉である」（齋藤 2014, 15）。だからこそ、乳幼児は「生活」の中で学び、育つのである。たとえば、1歳児が、食事中手づかみではなくスプーンを持ちたがったとする。持って掬いたくてもうまくいかない自分の技能・技術と自分の食べたいという欲求との間での葛藤があるのかもしれない。また、そこには、隣で友だちが上手に掬って美味しそうに食べている姿があり、自分もやってみようという意欲に駆られているのかもしれない。あるいは、いつもお茶碗のご飯をスプーンで集めて口に入れてくれる保育者の姿を見て、掬うことへの興味や自分にもできるという確信が生まれているのかもしれない。こうした食事場面では、乳幼児も、主体的に食事（生活）にかかわり、友だちや保育者とかかわりあいながら食事を楽しんでいる。そして、保育者は、乳幼児の生活主体としての育ちを支援するために、テーブルを囲んで傍らで見守りつつスプーンの操作の支援をするなど、物的空間的環境を整え、援助をしている。

このような生活活動の主体者として乳幼児を尊重し、主体形成を支援していくための保育室環境をどう整えていけばいいのかを考えていくことは、保育者が具体的直接的に表情や言葉かけでかかわっていく保育者の専門性や実践力の問題とともに、重要な実践課題であり研究課題であると考えられる。

そこで、次節では、1、2歳児の保育室環境の現状や研究の動向について報告する。

3. 保育室環境の現状と研究の動向

人間の発達は「個人と環境との相互作用」（Bronfenbrenner

1979=1996) の中で行われるが、保育環境も、保育を支える理念や思想、制度や意識を背景に、「ひと」と「もの」や「空間」との相互作用によって成り立っている。そのため保育環境については、無藤 (2012, 4) が述べるように、「環境のハードとソフトの双方を取り上げる必要がある」のだが、本稿では、保育室環境の「もの」や「空間」にかかわる研究に注目する。保育の環境がどうあるべきかという問いに対しては、全国社会福祉協議会 (2009) が、欧米と比較した日本の実態調査を踏まえ、現行の面積基準を見直す必要があることを指摘している。たとえば、フランスのパリでは子ども一人当たり知育室のみで 3.1 m²、知育室と睡眠室兼用では 5.5 m² となっており、その中に、トイレや水遊び室、サービスエリア、受付管理エリア、収納エリアは含まれていない。ドイツのザクセン州では、3歳未満児一人当たりの面積は 3.0 m²、3歳以上児 2.5 m² となっている。イングランドでも「子どもが使用できる純空間」として 2歳未満児 3.5 m²、2歳児 2.5 m²、3歳以上児 2.3 m² と決められている。また、スウェーデンストックホルム市では、廊下や玄関、児童用トイレ、おむつ替えの部屋を含むが、子ども一人当たり 7.5 m² となっている。しかし、その一方、日本では、乳児のほふく室では 3.3 m² だが、ほふくしない 2歳未満の乳児は 1.65 m²、2歳以上の居室は 1.98 m² となっており、しかも廊下を含むか含まないかは明示されていない。全国社会福祉協議会 (2009) では、乳幼児の生活・活動を支えるための保育環境・空間について検討を行い、導き出された面積基準として、2歳未満児では 4.11 m²/人、2歳以上児では 2.43 m²/人が必要だとしている。保育室の最低基準は、その国の、子どもに対する考え方がよくわかるひとつの指標であり、日本の乳幼児のための保育空間の充実が課題となっている。

3歳未満児保育に関する論文は、3歳以上児ほど多くはなく、保育室環境の「質」に関する論文は、散見されるにすぎない^{*6}。しかし、Harms 他「Early Childhood Environment Rating Scale-Revised Edition」(保育環境評価スケール改訂版、以下 ECERS-R と省略) に関する論文は、近年急速に増加している。訳者でありこのスケールを日本保育界への紹介者である埋橋 (2004 a, b) は、「現在の日本の保育でともすれば漠然と情緒的に語られがちな保育の重要な構成要素がきわめて合理的に整理され、明確な概念化が行われていること」に魅力を感じたと述べている。0歳から2歳半までの保育環境に関しても、「Infant and Toddler Environment Rating Scale Edition」(以下、ITERS-R と省略 埋橋訳『保育環境評価スケール②乳児版』)^{*7} が、乳児の集団保育の質を測定するスケールとして出版され、これらは国際的に広く使用され、研究が報告されている (Sheridan et al. 2019; Perlman et al. 2019;

Hu 2015; La Paro et al. 2014)。たとえばノルウェー国内の206の幼児グループの保育環境を調査した Bjørnstad, Os (2018) は、有資格者の存在や、保育者と子どもの比率の小ささや安定性は、保育の質と関連していることを明らかにし、保育室内の「衛生面」や「安全性」や「遊びの材料へのアクセス」についてはノルウェーの保育はまだ十分とは言えないということを報告している。

日本の保育は、どちらかといえば、「スケールを用いて保育プロセスの質を振り返り、自ら評価し質の向上に取り組むというサイクル」をあまりしてこなかったといえる。しかし、「もともと日本の保育の質が一定以上の園が多い」のでこのスケールでは「飽き足らないという場合がある」(秋田 2016, 115) ことは想定しつつも、今後、他の評価スケールも含めて活用の方法を工夫すれば、日本の保育者同士が保育の質を捉えるための議論のきっかけにすることはできるだろう。

子どもは誰しも空間を発見する力を持っている (デルリオ 2011, 14) と言われる。しかし、子どもにとって意味のある活動が展開される可能性があるかと保育者が認識するかどうかによって、「もの」や「空間」は全く違った意味をもってくるのではないだろうか。環境の意味を理解するだけでなく、環境に意味を与えるのも、子どもと保育者なのである。

レッジョ・エミリアの実践的研究者 Rinaldi (1998, 120) は、子どもたちのために「どのような空間を構成・組織するべきか」という問題に以下の6つを挙げている (筆者訳)。

- ①子どもの可能性や能力、好奇心を広げられる空間
- ②ひとりで、または、他の友だちやおとなと探究したり研究したりすることができる空間
- ③学校・保育所の中で行われるすべてのプロジェクトの一員であると気づけるような空間
- ④子ども自身のアイデンティティやジェンダー、自主性や安全性を補強する空間
- ⑤他の人と一緒に何かをしたりコミュニケーションをとれる空間
- ⑥自分のアイデンティティやプライバシーが尊重されることがわかる空間

「楽しみをもたらす、学びを推し進める感性やひらめきをもって探究することのできる環境、そこに住む人々の生活に共感し、人々の生活の意味を理解するだけでなく生活に意味を与えるような環境」が必要なのだというわけである。

4. 3歳未満児の保育室環境—「もの・空間」に対する保育所保育者の意識

筆者は、前述の Harms et al. (2003=2004) の ITERS-

R (保育環境評価スケール②乳児版) と、岩立他 (1997) の「保育者の評価に基づく保育の質尺度」と、全国社会福祉協議会 (2009) の「機能別にみる環境・空間の設え: ガイドライン」を参考に項目を作成し、全国の保育所保育者を対象に「3歳未満児の生活と遊びを支える保育環境に関する調査」を行った。本節ではこの結果について報告する。生活者としての乳幼児の視点からみてより良い保育環境を考える上で、アドボカシーの観点からも、保育者がどのように保育環境を捉えているかを理解することは極めて重要であると考えられる。なお、本研究の一部は、日本家政学会誌第65巻第6号においてすでに報告されており、図表は一部を引用する (齋藤・宮脇 2014)。

対象は、子育てネット全国保育所一覧^{*8} をダウンロードし、二段層化抽出法により保育所を選び郵送によって質問票を配布した。神奈川県 K 市は、企業等が運営する認可外保育所を含む全市調査をおこなったため、K 市社会福祉協議会及び K 市保育協議会に協力を要請しその旨を記載した調査依頼状と共に市内全園に送付した。そのため東京都294園、神奈川県362園 (うち162園は K 市)、埼玉県180園、千葉県147園、上記以外の全国224園、全体で1,207園の保育園に郵送。32都道府県、公私立合わせて293園 (公立53園、私立100園、不明140園) から回収があった。園の回収率は24.3%。有効回答数は、回答の返送が4人分以上だった園もあったため1,338となった。

質問項目は、保育の最低基準ではなく、保育者自身が必要と感じて実施しているものや、Harms 他スケールのように日本以外の国の文化を素地に作成されているものもあったが、すでに尺度として何らかの形で使用されている項目を中心に設定した。作成の観点として、おもちゃや絵本など保育環境内の「もの」に関する項目やコーナーや活動の場所などの「空間」に関する項目を44項目設定した。この項目について、実態として行っているという度合い (実施度) と、理想としては行いたいという度合い (重要度) を5段階評定で選択する調査を行い、分析した。

結果を2点に分けて報告する。

(1) 保育所保育者は、3歳未満児保育における保育室環境をどのように捉えているのか

実態 (実施度) についての「もの」「空間」44項目について因子分析を行った (重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転) 結果、因子の解釈可能性の観点から四つの因子を抽出した。

因子1は、「保育者がクラスの子ども又は担当の子どものお気に入りの遊びやおもちゃを把握している」「おもちゃの取り扱いなどのトラブルにはお互いの主張を聞き

合い認め合えるよう援助している」という、保育者がどのような遊びに配慮をしているかに関する項目だけでなく、「子どもの行為について言葉で代弁」したり、「発達段階や年間指導計画に配慮して配置するおもちゃを変え」「部屋の中のおとなの動線が子どもの遊びを妨げないよう」に配慮するという様々な角度から環境を見るという保育者自身の視野の広さを感じる項目も多い。そこで、この因子は、子どもの発達や活動、おもちゃの適時性など視野を広くもって環境を整えていると捉える因子と考え「保育者の視野の広さが反映された環境」とした。

因子2は、「ハイハイしたり歩き回ることでできる動的なスペース」「清潔な家具」「自然光や換気の調節のできる設備」「持ち物の個別収納」「日常のケアのための家具」「子どもとおとながくつろぐための家具」「歩き始めの子どものサイズに合わせたテーブルといす」など、日常生活活動やケアのための設備や家具に関する項目が多いため、「日常のケアのための十分な環境」とした。

因子3は、「ままごとコーナーに人形が一体ずつ配置されている」ことや、「個人用おもちゃの用意」「いつでも触ってくつろげる場所」など安心感のある環境についての項目や、動的な遊びと静的な遊びはコーナーを離して配置すること、同じような遊びのコーナーを隣り同士で配置するなど、コーナーについての配慮がうかがえた。また、「おとなと子どもが快適に接するための家具」の用意など、3歳未満児が快適に過ごすための環境への意識が潜在的にあると考えられた。そこでこれらを総合して「安心感のある快適な環境」と命名した。

因子4は、「子ども自身が着替えを入れるための自分用の棚やかご」「トイレの後に子どもが手を洗う流し台」「子どもサイズの便器」「子どもが自分で捨てられるゴミ箱」など、子ども自身が自主的に動いて生活するための環境整備についての項目が並び、子ども自身が主体的に活動するための環境整備を行っているという意識が反映されていると考えられたため、「子どもの主体性が配慮された環境」とした。

以上から、保育者は、3歳未満児の保育環境について、快適で十分整った清潔な保育空間づくりを意識し、発達と活動の違いに応じてコーナーやおもちゃを用意しつつ、子どもたちの主体性についても配慮しており、そこには、保育者の意図が反映されていると捉えているのではないかと推察された。

(2) 各因子は年齢や保育者歴とどう関連するのか

保育室の「もの」や「空間」の実態 (実施度) に関する44項目の因子分析の結果、4因子解が採用されたので、これら4つの因子と回答者の属性との関連性を検討した。回答者の属性と因子下位尺度得点との関連は、表2の通

表1 3歳未満児保育における「もの」「空間」に関する保育者の意識（実態）項目の因子分析（齋藤・宮脇 2014）

番号	因子とその項目	因子1	因子2	因子3	因子4	h^2
因子1 保育者の視野の広さが反映された環境 ($\alpha=0.813$)						
41	保育者が、クラスの子どもまたは担当の子どものお気に入りのあそびやおもちゃを一人一人把握している	.703	-.113	.083	-.047	.433
42	おもちゃの取り合いなどのトラブルには、お互いの主張を聞きあい認めあえるよう援助している	.612	-.047	-.096	.132	.391
37	ものや動作の名前だけでなく、感情や子どものしようとした行為などについて言葉で代弁するようにしている	.592	-.007	-.164	.123	.361
31	発達段階や年間指導計画の時期に配慮して配置するおもちゃを変えている	.566	-.095	.322	-.118	.455
43	子どもが安全に遊ぶよう配慮したり、ルールの説明をしたりしている	.547	-.028	-.272	.246	.381
15	遊ぶ場所を十分確保するために使わない家具はなるべくクラス内に置かないようにしている	.515	.173	-.153	-.021	.316
33	部屋の中のおとなの動線が子どものあそびを妨げないように配慮されている	.496	.052	.140	-.011	.369
26	口に入れるおもちゃは毎日洗うか拭いている	.418	.022	.202	-.237	.228
32	季節にふさわしいおもちゃが用意されたり、季節行事に参加することがある	.415	.006	.093	.143	.322
40	制止や禁止の指示を極力少なくするために、部屋の中に子どもが登りたくなるような机や台を置かないようにしている	.413	.124	-.083	-.109	.167
12	室内構成に問題があるためにおとなの目の届かない場所がない	.393	.230	-.048	-.083	.251
因子2 日常のケアのための十分な環境 ($\alpha=0.774$)						
1	クラスの室内は子どもがハイハイしたり歩き回るだけの十分な広さがある	-.011	.599	-.145	-.088	.278
6	おむつ交換や着脱、食事など日常の決まったケアをするための十分な家具が用意されている	-.149	.593	.171	.112	.406
2	室内または室外に、子どもたちのために動的なあそびをするスペースがある	.063	.537	-.073	-.003	.303
10	一日のうちのどこかで、くつろげるような場所とおもちゃが用意されている	-.005	.530	.310	-.052	.471
4	床や壁、家具は適度に清潔で手入れが行き届いている	.240	.516	-.048	-.115	.384
3	部屋の自然光や換気の調節ができる	.086	.484	-.086	.004	.263
5	子どもの生活に必要な持ち物が個別に収納できるようになっている	.015	.480	-.116	.174	.300
7	歩き始めの子どもには食事に子どもサイズのテーブルといすが用意されている	-.021	.388	-.032	.230	.251
因子3 安心感のある快適な環境 ($\alpha=0.766$)						
39	人形はままごとコーナーに一体ずつ配置され、子どもがすぐとれるようになっている	-.104	-.135	.615	.133	.327
35	マイ人形やマイバッグなど、何らかの個人用おもちゃを用意している	-.160	-.232	.605	-.017	.284
11	やわらかいクッションや布で作った人形などをいつでも触ってくつろげる場所がある	-.019	.281	.555	-.089	.452
28	動きの激しいあそびのコーナーと動きの少ない落ち着いたあそびのコーナーは少し離して配置している	.221	-.103	.528	.049	.413
27	ブロックや積み木、手先を使ったあそびのためのおもちゃなど似たような使い方をしているおもちゃは、隣同士で配置している	.276	-.159	.498	-.010	.370
17	着脱コーナー、おむつ替えコーナー、絵本を読むコーナーなど室内が保護者にもわかるように整理されている	.049	.135	.492	.088	.394
9	授乳用のソファなど、おとなと子どもが快適に接するための家具が置かれている	-.237	.165	.450	-.034	.183
30	いろいろな経験をするのにふさわしい空間が用意されている	.190	.110	.441	.020	.405
38	子どもがお気に入りのものを家庭から持ってきたときには受け入れている	-.042	-.232	.356	.012	.115
39	戸外あそびの場所は、3歳未満児用に確保され安全性が保たれている	.053	.040	.350	.032	.170
因子4 子どもの主体性に配慮された環境 ($\alpha=0.658$)						
23	子ども自身が着替えを入れるための自分用の棚やかごがある	-.103	-.036	.109	.612	.334
19	トイレに行った後や食事の前に子どもが手を洗えるように、子どもサイズの流し台が用意されている	-.095	.047	.024	.536	.262
22	子どものわかるところにゴミ箱があり、1歳児以降の子どもは自分で捨てることができるようになっている	.065	-.084	.028	.505	.270
18	子どもサイズの便器が用意され、毎日清潔にされている	.063	.121	-.047	.482	.327
21	子ども専用の布団または布団カバーまたはベットまたは枕が用意されていて子ども自身にわかるようになっている	.094	.089	-.042	.378	.226
因子抽出法：重みなし最小二乗法回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法						
		因子間相関				
			1	2	3	4
		1	1			
		2	.625	1		
		3	.515	.390	1	
		4	.579	.422	.281	1

りとなり、因子1とクラスの子どもの年齢（以下、クラスの年齢と表記）以外のすべての属性、因子2と勤務する園の運営主体、因子3と保育者歴・勤務形態、因子4とクラスの年齢・運営主体との間に関連性がみられた。

この各因子の下位尺度得点を SPSS を用いて算出し SPSS の「連測変数のカテゴリ化」を用いて尺度得点を25%の幅で4分割した。尺度得点の値が小さいほうからラベルを F1_1, F1_2, F1_3, F1_4（因子1下位尺度得点の場合）とした。

カテゴリ化した4つの因子下位得点と保育者歴とのクロス集計・カイ2乗検定を行った結果、保育者歴と因子

1下位尺度得点との関連性が0.1%水準で、また保育者歴と因子3下位尺度得点との関連性が5%水準で有意であった。保育者歴5年未満と因子1下位尺度得点F1_1のセルをみると、調整済み残差が3.0となっており、保育者歴20年以上と因子1下位尺度得点F1_4とのセルにおける調整済み残差は3.7となっていた。

これらの項目群（保育者歴、年代、因子1下位尺度得点、因子3下位尺度得点）のカテゴリ間の関係を一覧するために、SPSS CategoriesにあるOVERALS（非線形正規相関分析）を用いて各カテゴリの重心を2次元散布図にあらわした（図1）。

表2 回答者の属性と因子下位尺度得点との関連 (齋藤・宮脇 2014)

回答者の属性	因子下位尺度得点 (4カテゴリ)			
	因子1	因子2	因子3	因子4
性別	$\chi^2(3) = 10.619^*$	$\chi^2(3) = 4.263^{n.s.}$	$\chi^2(3) = 1.197^{n.s.}$	$\chi^2(3) = .657^{n.s.}$
年代	$\chi^2(9) = 32.987^{***}$	$\chi^2(9) = 6.866^{n.s.}$	$\chi^2(9) = 8.396^{n.s.}$	$\chi^2(9) = 5.285^{n.s.}$
保育者歴	$\chi^2(9) = 30.404^{***}$	$\chi^2(9) = 14.973^{n.s.}$	$\chi^2(9) = 19.235^*$	$\chi^2(9) = 5.530^{n.s.}$
勤務形態	$\chi^2(6) = 14.697^*$	$\chi^2(6) = 8.728^{n.s.}$	$\chi^2(6) = 14.645^*$	$\chi^2(6) = 11.600^{n.s.}$
クラスの年齢	$\chi^2(12) = 19.773^{n.s.}$	$\chi^2(12) = 17.419^{n.s.}$	$\chi^2(12) = 19.811^{n.s.}$	$\chi^2(12) = 116.785^{***}$
勤務する園の運営主体	$\chi^2(3) = 9.525^*$	$\chi^2(3) = 12.849^{**}$	$\chi^2(3) = 6.131^{n.s.}$	$\chi^2(3) = 8.230^*$

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, n.s. $p > .05$

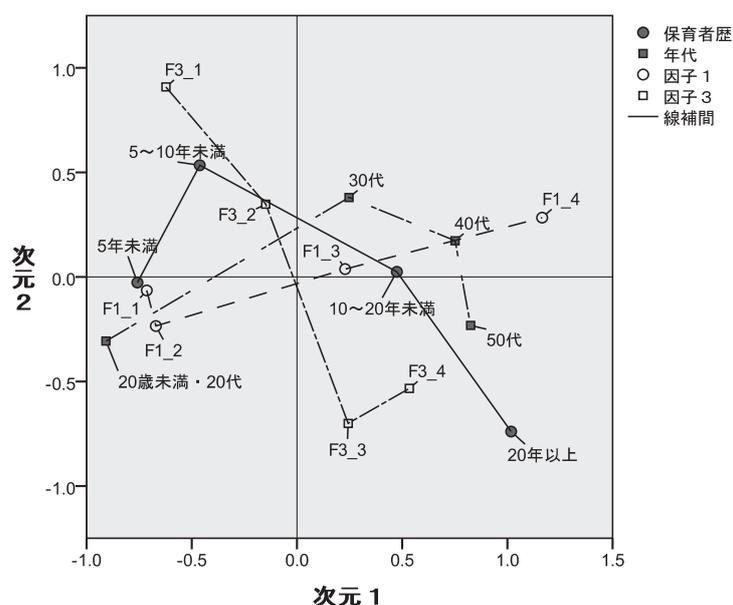


図1 保育者歴・年代と因子1・3下位尺度得点の重心

(齋藤, 宮脇 2014)

この結果, 因子1「保育者の視野の広さが反映された環境」は, 保育者歴が長ければ長いほど, 年代が高いほど, 得点が高いことを示した。つまり, 視野の広さが反映された環境を作っていると考えられる保育者は, 保育者としての経験年数が長く, 年齢も高いということを示しているといえる。また, 因子3「安心感のある快適な環境」を作っていると考えられる保育者は, 保育者歴も長く, 年齢も高いということも示された。

5. 保育室環境における「個別性」と「安心感」について

保育所入所は, 就労や職場復帰をめざす保護者にとって喜ばしくも緊張を伴うイベントであるが, 初めて入所する子どもにとってもストレスのかかる非日常的体験である。入所時の子どもの適応過程や心理的拠点形成過程の分析など, 子どもの側からの視点も必要である。たとえば, 3歳未満児がタオルや人形など自分の「お気に入り

りのもの」を家庭から保育所に持ってきた時にどう扱うのかについては議論が分かれるところである。家庭から園へ移行する際に持ち込むおもちゃは「移行対象」(Winnicott 1953)といえる。初めて「移行対象」に着目した児童分析医 Winnicott は, 幼児が肌身離さず持ち歩く毛布や人形などの無生物は, 指しゃぶりと同じ, ①子どもの身体から独立しており, ②対人的世界に広がっていく性質を持っているという特徴があるとしている。

また, こうした「お気に入りのもの」を家庭から持ちこむことを認めることによって, 入所児の安心感を確保しようとする実践のほかに, 園内で, 一人ひとり柄の違うハンカチやバッグ, 人形などの「個人持ちおもちゃ」を用意して, 買い物ごっこやお出かけごっこを子どもたち同士で楽しむ実践を展開する園もある。このように, 園内の個人持ちおもちゃは, 様々な意味をもつ可能性がある。

ところが, こうした個別性の高い「もの」に関する実

践は、あまり重視されていないようである。前述の調査において、もっとも実施度（実態）の平均値が低かった項目が、項目42「マイ人形やマイバッグなど、何らかの個人用おもちゃを用意している」（平均値1.86）-「個人持ちおもちゃ了解意識」と命名-であり、次に低かった項目が、個人持ちおもちゃに関わる項目41「子どもがお気に入りのおもちゃを家庭から持ってきたときには受け入れている」（平均値2.74）-「移行対象了解意識」と命名-であった（項目全体の平均4.08）。そこで本研究では、筆者が全国の保育所保育者を対象に行った意識調査（齋藤、2012）をもとに、「家庭から園に持ち込むお気に入りのもの」と「園で用意する個人持ちおもちゃ」の二つの「個別性」の高いおもちゃに関する項目への回答と、安心してくつろぐための物的空間的環境に関する項目への回答との関連を調べた。なお、この結果の一部は齋藤・小川（2015）と齋藤（2017）で報告されている。統計処理は、SPSS Statistics 22 で行った。

これらの項目と下記の各項目との関連性を一元配置分散分析によって検討したところ、項目41と42について実施度（実態）が高い人ほど下記の項目とに関連があった（0.1%水準で有意）。

項目59「保育者は子どもの個別のニーズに応じて遊びへの参加を励ます」

項目62「保育者が子どものお気に入りの遊びやおもちゃを一人ひとり把握している」

項目10「一日のどこかでくつろげるような場所とおもちゃが用意されている」

項目11「柔らかいクッションや布で作った人形をいつでも触ってくつろげる場所がある」

また、保育歴のグループによる一元配置分散分析では、「移行対象了解意識」（実態）に関して、5年未満のグループと20年から25年の保育歴のグループとに有意差がみられた（TukeyHSD $p < .05$ ）。また、項目54「責任分担が明確になっていて問題が共有され生活援助やあそびがスムーズに行われると「移行対象了解意識」との間でグループ間に5%水準で有意差がみられた。

つまり、「移行対象了解意識」や「個人持ちおもちゃ了解意識」が高い回答者は、子どもの個別のニーズやお気に入りのおもちゃに対して敏感性が高く、子どもが安心してくつろぐことのできる環境を重視している可能性が示唆された。

これは、保育者が子どもの「個別性」への視点を持つことは、子どもの個々の遊びを促すだけでなく、子どもの「安心感」に繋がっていると、保育者が意識している可能性があると考えられる。

さらに、「個人持ちおもちゃ」は、柄の違う布やバッグをみんなでもって、お出かけごっこをしたり、積木を包

んでお弁当ごっこをしたりと、同じ素材で共感しあって楽しめる良さがあり、友だち同士での「関係性」や「共感性」を育てる場合もある。

「個人持ちおもちゃ」や家庭からの持ち込みおもちゃは、子ども同士のトラブルのもとになる可能性もあるが、取り組み方によっては、子どもの心理的拠点のひとつとなりえる。また、お互いのおもちゃを認めあい大事にしあうことで、個を尊重し、子ども同士の関係性を高める機会を作ることにもなる。個別性を備えた「もの」への意識が実践研究においても進展されるべきであろう。

6. 乳児院保育者調査との比較と保育室環境への展望

ここでは、筆者が行った乳児院保育者を対象にした調査報告^{*9}（齋藤・小川 2015）との比較から乳児院と保育所の保育室環境への保育者の意識の違いについて述べる。

保育者調査における保育室環境の実態（実施度）に関する44項目と、乳児院調査における保育室環境の実態（実施度）に関する54項目のうち、共通する項目について、独立したサンプルのt検定を行った。その結果、保育所調査の方が有意に高い項目（1%水準以上）は、「自分で選んで絵本を読むコーナー」、「いろいろな経験をする空間」、「発達段階に配慮したおもちゃ」、「動と静の遊びのコーナー」であった。

これは、保育所においては、1歳児クラス、2歳児クラスと、発達段階ごとに保育室が分かれている場合が多く、子どもの活動に合わせてコーナーを作り、経験の豊かさを保障しようとする保育のあり方が理解されていることからくるのではないかと考えられた。

一方、乳児院調査の方が有意に高い項目（0.1%水準以上）は、「柔らかいクッションや人形でくつろぐ場」、「授乳用のソファなど、くつろぐ場」、「おもちゃの受け入れ」、「個人用おもちゃの用意」であった。これらは、個別性を重視し、子どもが暮らす場として、「くつろぐ」ための「もの」や「空間」を確保していること、「移行対象」としての「もの」（おもちゃ）を保育の中で位置づけていること、養育担当制が乳児院の中でも定着し、少人数グループケアが行われていることで、おもちゃの管理がしやすくなっていることなどが推測された。

このように、保育所と乳児院という施設の性格の違いによって、重視する環境のあり方は変わってくる可能性が推測される。それは、暮らしの中で「生命の保持と情緒の安定」を重視する乳児院という施設の特性と、「発達支援や教育的関わり」を重視する保育所という施設の特性の違いから来るものではあるが、保育所保育の中でも、様々な活動が一人ひとりの子どもの特性や状態に応じて、展開されるべきで、そうした保育内容の目的に合わせて保育室環境も構成されるべきだろう。高山（2014, 41）

1, 2歳児の保育室環境と保育内容との関連

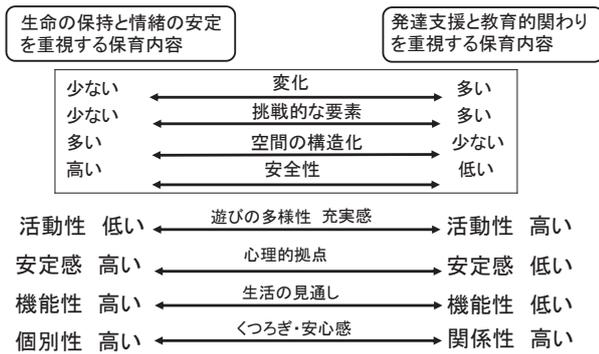


図2 1, 2歳児の保育室環境と活動との関連

(高山 (2014, 42) の図を参考に, 筆者追記し作成 2019)

は, 前述の保育内容に照らして, 生命の保持と情緒の安定を重視する環境では, 変化は少なく, 挑戦的な要素も少なく, 空間をわかりやすく構造化して, 安全性も高くなっているが, 発達支援を重視する環境では, 変化が多く, 刺激があって, 安全性が少し下がるが挑戦できる要素の多い環境が用意されていると指摘する。

別の角度からみれば, 遊びの多様性や充実感は, 活動性が高く発達支援や教育的関わりを重視する保育内容のほうに多く, そこでは, 子ども同士, あるいは保育者-子ども関係などの関係性も高くなる。一方, 生命の保持と情緒の安定を図る環境では, 活動性は低くなるが, 構造化の中で機能性も高くなり, 生活の見通しも育つ。その結果, 「もの」や「場所」を心理的拠点にして, 安定感を図ることもでき, 個性性の高い「もの」や「場所」によってくつろぎや安心感も得ることができるのではないだろうか。

「保育」が「養護及び教育を一体化に行う」(厚生労働省 2017) ものである以上, 乳幼児, 特に1, 2歳児の保育室環境には, 活動性や安定感, 機能性や個性性に配慮した環境構成が必要なのではないかと考える。

7. まとめと今度の課題

日本の3歳未満児の保育室環境については, 様々な運営主体による多様な保育方針を持つ保育所が増加しており, 設置された場所や周辺地域の状況を踏まえて工夫が求められている。したがって, 今後の保育室環境に関する研究の課題としては, 以下の四つが最低限必要だろう。

第一に, 様々な保育内容や保育方法を持つ保育所において, 質の高い保育環境と言える保育室の在り方を検討する。第二に, 具体的な保育室における「もの」と「空間」が, 乳幼児の何をどのように育てているのか, 保育室環境の変容とともに乳幼児はどう変化するのかなど,

保育室環境の発達の意義を明らかにする。第三に, 3歳未満児の保育の場でもある乳児院における保育室環境の質的向上に向けて, 実践的臨床的研究を積み上げる。第四に, 保育室環境の質を保障するための制度上の問題を明らかにし, その改善の方策を検討する。

日本の1, 2歳児は, 「世話をされるもの」としてではなく, もっと生活主体として位置付けられていく必要がある。「発達」と「集団」と「生活」を切り結ぶ保育理論の構築が必要だと考える。そして, 何よりも, 生活者自身である乳幼児の視点からみてよりよい保育環境を整えることが喫緊の課題であると考えられる。

謝辞および付記

調査にご協力くださいました保育所及び乳児院の先生方, 分析にあたりご指導・ご指摘くださいました先生方に深く感謝申し上げます。なお, 本研究で紹介した筆者の研究は, 以下の助成を受けています。JSPS KAKENHI Grant Number 21500714 (基盤研究C 研究代表者 齋藤政子) 及び JSPS KAKENHI Grant Number 24500909 (基盤研究C 研究代表者 齋藤政子)。

脚注

- *1 「保育」は一般的には「乳幼児の心身の発達を目的として, 幼稚園, 保育所などで行われる用語を含んだ教育のこと」(小川 2006) である。この文言の成立過程について, 太田 (2012) は, 「撫養」, 「看護扶育」, 「扶育誘導」や「幼稚教育」や学制発布で登場した「幼稚小学」(文部省 1979, 34) を使用せず, 「保育」という言葉をあえて作った理由として, 「人間形成に働きかけるおとなの営みの特質」が6歳未満とそれ以上とは違うだろうという意思の現れではないかと述べている。
- *2 外務省. “JAPAN SDGs Action Platform”. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html> (入手日: 2019.12.1).
SDGs (持続可能な開発目標) は「2001年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として, 2015年9月の国連サミットで採択された2016年から2030年までの国際目標」であり, ①貧困, ②飢餓, ③保健, ④教育, ⑤ジェンダー, ⑥水・衛生, ⑦エネルギー, ⑧成長・雇用, ⑨イノベーション, ⑩不平等, ⑪都市, ⑫生産・消費, ⑬気候変動, ⑭海洋資源, ⑮陸上資源, ⑯平和, ⑰実施手段がある。
- *3 OECD (2019b). Country Note Japan Education at a Glance: OECD Indicators. https://www.oecd.org/education/education-at-a-glance/EAG2019_CN_JPN.pdf (入手日: 2019.11.5)
- *4 たとえば, OMEP (世界幼児教育機構) は, 2010年42巻2号の学会誌『IJEC』の特集を「3歳未満児保育の研

究」と題し、ヨーロッパ7カ国の3歳未満児保育の現状と研究成果について報告している (Hännikäinen 2010, Rayna 2010: Greve, Solheim 2010, Musatti, Picchio 2010, Johansson, Emilson 2010, Brostrom, Hansen 2010)。その中で編者の Johansson, Emilson (2010) は、先進国の多くで女性のライフスタイルが変化し、女性の高学歴化や生殖活動の変化がおり、「ECEC」に参加する3歳未満児の数は過去最高となっていることを論じている。また、ノルウェーでは、2004年から2008年までに幼稚園 (kindergartens) に在籍する3歳未満児の割合が47.8%から74.7%に増加したことをあげ、3歳未満児保育を担う保育者の専門的養成が急務であることを示唆している (Greve, Solheim 2010)。

- * 5 渡辺 (1999, 12) は、その「生活をつくる力」の要素として、「生活を自立的に営む力」、「生活に主体的にかかわる力」、「ともに生きる力」、「男女の平等な関係を築く力」の4つをあげている。
- * 6 教育系論文検索サイト ERIC (Educational Resources Information Center) によると、ECERSをキーワードとする論文は161本であるのに対し、ITERSでは14本と少なかった (2019年12月15日現在)。しかし、国内の論文検索サイト CiNii では、「乳児保育、空間構成」をキーワードとする論文は、2015年11月15日現在、村上他 (2008)、村上 (2010)、汐見他 (2012) など5件のみであったのが、同じキーワードで2019年12月15日現在161本に増えており、また、「1, 2歳児、保育環境」では77本、「3歳未満児、保育室」では208本の論文が確認された。
- * 7 ITERS-R (Harms et al. 2003) では、評価指標として①空間と家具、②個人的な日常のケア、③聴くことと話すこと、④活動、⑤相互関係、⑥保育の構造、⑦保護者と保育者という7つにそれぞれ項目が用意され、よく観察し、聴き取った上で、それぞれ、不適切、最低限、よい、とてもよい等の評価を行っていくようになっている。
- * 8 インターネット上の「子育てネット全保育所一覧」に、2009年にアクセスし、それに基づいて質問票を配布したが、現在このサイトは削除されている。
- * 9 全国乳児福祉協議会にご協力いただき全乳児院131か所に施設長宛依頼状とともに調査票を郵送した。回答があった乳児院は103施設 (回収率79%) 回答者1459人である。調査内容は、齋藤 (2012) を参考に3歳未満児の生活を遊びを支える保育環境に関する項目を乳児院の現状に合わせて54項目作成した。実態 (実施度) と理想 (重要度) を5段階で評定、分析はSPSS Statistics 20で行った。

文 献

秋田喜代美 (2016)。“日本の保育実践の質のさらなる向上への示唆”。イラム・シラージ、デニス・キングストン、エドワード・メルウィッシュ。秋田喜代美、淀川裕美訳。「保育プロセスの質」評価スケール、明石書店、115

(Siraji, I.; Denise Kingston, D.; Edward Melhuish, E. (2015). *Assessing Quality in Early Childhood Education and Care: Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being (SSTEW) Scale for 2-5-year-olds provision*. UCL Institute of Education, University College London, IOE Press).

- 荒井紀子 (2005)。“第3章第2節 生活主体を育むカリキュラムの構想”。生活主体を育む：未来を拓く家庭科。荒井紀子編著。ドメス出版、51。
- Bjørnstad, E.; Os, E. (2018). Quality in Norwegian childcare for toddlers using ITERS-R. *European Early Childhood Education Research Journal*. Vol. 26, No. 1, 111-127.
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The Ecology of Human Development*. Cambridge, MA. Harvard University Press (磯貝芳郎、福富護訳 (1996)。人間発達の生態学：発達心理学への挑戦。川島書店)。
- Broström, S.; Hansen, O. H. (2010). Care and education in the Danish crèche. *International Journal of Early Childhood*. Vol. 42, No. 2, 87-100.
- デルリオ、グラツィアーノ (2011)。“教育に力を注ぐ地域社会”。驚くべき学びの世界：レッジョ・エミリアの幼児教育。佐藤学監修、ワタリウム美術館編。東京カレンダー、14。
- De Schipper, E. J.; Riksen-Walraven, J. M. A.; Geurts, S. A. (2006). Effects of child-caregiver ratio on the interactions between caregivers and children in child-care centers: An experimental study. *Child Development*. Vol. 77, No.4, 861-874.
- Greve, A.; Solheim, M. (2010). Research on children in ECEC under three in Norway: Increased volume, yet invisible. *International Journal of Early Childhood*. Vol. 42, No. 2, 155-163.
- Hännikäinen, M. (2010). 1 to 3-year-old children in day care centres in Finland: An overview of eight doctoral dissertations. *International Journal of Early Childhood*. Vol. 42, No. 2, 101-115.
- Harms, T.; Cryer, D.; Clifford, R. (2003). *Infant / Toddler Environment Rating Scale, Revised edition*, Teachers College Press (埋橋玲子訳 (2004)。保育環境スケール②乳児版。法律文化社)。
- Hu, B. Y. (2015). Comparing cultural differences in two quality measures in Chinese kindergartens: The early childhood environment rating scale-revised and the kindergarten quality rating system. *Compare: Journal of Comparative and International Education*. Vol. 45, No. 1, 94-117.
- Johansson, E.; Emilson, A. (2010). Toddlers' life in Swedish preschool. *International Journal of Early Childhood*. Vol. 42, No. 2, 165-179.
- 一見真理子 (2016)。“第5章 OECDの保育 (ECEC) 政策へのインパクト”。保育学講座②保育を支えるしくみ制

- 度と行政. 日本保育学会編. 東京大学出版会, 119-144.
- 伊藤葉子 (2019). 研究の動向40—家庭科教育の動向. 家政誌. Vol. 70, No. 12, 845-848.
- 岩立志津夫, 諏訪きぬ, 土方弘子, 金田利子, 木下孝司, 齋藤政子 (1997). 保育者の評価に基づく保育の質尺度. 保育学研究. Vol. 35, No. 2, p. 272-279.
- 古賀松香 (2011). 1歳児保育の難しさとは何か. 保育学研究. Vol. 49, No. 3, 8-19.
- 厚生労働省 (2017). “第1章総則1 保育所保育に関する基本原則”. 保育所保育指針 (厚生労働省告示第百十七号).
- La Paro, K. M.; Williamson, A. C.; Hatfield, B. (2014). Assessing quality in toddler classrooms using the CLASS-Toddler and the ITERS-R. *Early Education and Development*. Vol. 25, No. 6, 875-893.
- 文部省 (1979). 幼稚園教育百年史. ひかりのくに, 204-207.
- 村上博文 (2010). 乳児保育室の空間変成と“子ども及び保育者”の変化: K 保育所0歳児クラス: 自由遊び時間におけるアクションリサーチ. 東京大学大学院教育学研究科紀要. Vol. 49, 21-32.
- 村上博文, 汐見稔幸, 志村洋子. (2008). 乳児保育室の空間構成と保育及び子どもの行動の変化—「活動空間」に着目して—. こども環境学会. Vol. 3, No. 3, 28-33.
- Musatti, T.; Picchio, M. (2010). Early education in Italy: Research and practice. *International Journal of Early Childhood*. Vol. 42, No. 2, 141-153.
- 無藤隆 (2012). 保育実践と保育環境 (総説). 保育学研究. Vol. 50, No. 3, 238-241.
- 日本家庭科教育学会 (2019). 未来の生活をつくる: 家庭科で育む生活リテラシー. 明治図書, 60.
- OECD (2001) *Starting Strong: Early Childhood Education and Care*. Paris. OECD iLibrary. DOI: <https://dx.doi.org/10.1787/9789264192829-en> (入手日: 2019.12.1).
- OECD (2004) *Starting Strong: Curricula and Pedagogies in Early Childhood Education and care: Five curriculum outlines*. Paris, Directorate for Education, OCED. <http://www.oecd.org/education/school/31672150.pdf> (入手日: 2019.12.1).
- OECD (2006). *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care*. Paris. OECD iLibrary (星三和子, 首藤美香子, 大和洋子, 一見真理子訳 (2011). OECD 保育白書: 人生の始まりこそ力強く—乳幼児期の教育とケア (ECEC) の国際比較. 明石書店).
- OECD (2012). *Starting Strong III: A Quality toolbox for Early Childhood Education and Care*. Paris. OECD iLibrary. (秋田喜代美, 阿部真美子, 一見真理子, 門田理世, 板村友人, 鈴木正敏, 星三和子訳 (2019). OECD 保育の質向上白書—人生の始まりこそ力強く: ECEC のツールボックス. 明石書店).
- OECD (2015). *Starting Strong IV: Monitoring quality in Early Childhood Education and Care*. Paris. OECD iLibrary.
- OECD (2019a). 「図表でみる教育2019年版」(Education at a Glance 2019) <http://www.oecd.org/education/education-at-a-glance/> (入手日: 2019.11.5).
- OECD (2019b). “Country Note Japan Education at a Glance: OECD Indicators”. https://www.oecd.org/education/education-at-a-glance/EAG2019_CN_JPN.pdf (入手日: 2019.11.5).
- 太田素子 (2012). 「家」の子育てから社会の子育てへ—幼稚園・保育所の登場と日本の近代社会—. 保育・家庭教育の誕生. 太田素子, 浅井幸子編. 藤原書店.
- 小川富士枝 (2006). “保育”. 保育小辞典. 宍戸健夫, 金田利子, 茂木俊彦監修. 大月書店, 292.
- Perlman, M.; Howe, N.; Gulyas, C.; Falenchuk, O. (2019). Associations between directors' characteristics, supervision practices and quality of early childhood education and care classrooms. *Early Education and Development*. London, Taylor & Francis Online, 1-17.
- Rayna, S. (2010). Research and ECEC for children under three in France: a brief review. *International Journal of Early Childhood*. Vol. 42, No. 2, 117-130.
- Rinaldi, C. (1998). “The space of childhood”. *Children, Spaces, Relations: Metaproject for an Environment for Young Children*. Ceppi, G.; Zini, M. Ed.. Reggio Emilia (Italy). Reggio Children Domus Academy Research Center, 120.
- 齋藤政子 (2012). 乳幼児の心理的拠点形成と保育環境に関する研究. 科学研究費補助金基盤研究 (c) 研究成果報告書 (JSPS KAKENHI Grant Number 21500714).
- 齋藤政子 (2014). 3歳未満児保育と「もの・空間」の発達の意義—保育所及び乳児院における1・2歳児の保育室環境に焦点をあてて—. 明星大学通信制大学院博士論文.
- 齋藤政子 (2017). 保育室環境における「個性」と「安心感」—「個人持ちおもちゃ」に対する保育者の意識調査の結果から—. 日本保育学会第70回大会発表論文集. P-C-12-2, 1054.
- 齋藤政子, 宮脇龍介 (2014). 3歳未満児保育における「もの」「空間」に対する保育者の意識—保育者歴・年代との関連に注目して—. 家政誌. Vol. 65, No. 6, 13-25.
- 齋藤政子, 小川貴代子 (2015). 乳児院保育者は院内の人的・物的環境についてどう捉えているのか—質問紙法による調査結果の分析から—. 日本乳幼児教育学会第24回大会発表論文集. 2-5-1.
- Sheridan, S.; Garvis, S.; Williams, P.; Mellgren, E. (2019). *Critical aspects for the preschool quality in Sweden. Policy of Early Childhood Education and Care: Early Childhood Education in the 21st Century*, Vol. 3, London/NewYork. Routledge, 170.
- 汐見稔幸, 村上博文, 松永静子, 保坂佳一, 志村洋子

- (2012). 乳児保育室の空間構成と“子どもの行為及び保育者の意識”の変容. 保育学研究. Vol. 50, No. 3, 298-308.
- Siraji-Blatchford, I. (2010). *Early Childhood Matters: Evidence from the Effective Pre-school and Primary Education Project (English Edition)*. Sylva, K. et al. (eds.). 1st Edition, London/New York, Routledge.
- 高山静子 (2014). 環境構成の理論と実践—保育の専門性に基づいて—. エイデル出版社.
- 日本家庭科教育学会 (2019). 未来の生活をつくる：家庭科で育む生活リテラシー. 明治図書, 60.
- 埋橋玲子 (2004a). はしがき. Harms, T.; Cryer, D.; Clifford, R. M. (2003). *Infant/Toddler Environment Rating Scale*. rev. ed., New York, Teachers College Press (埋橋玲子訳 (2004a). 保育環境評価スケール①. 法律文化社).
- 埋橋玲子 (2004b). イギリスにおける「保育の質」の保証—保育環境評価スケール (ECERS-R) の位置づけに注目して. 保育学研究. Vol. 42, No. 1, 196-204.
- 渡辺彩子 (1999). “第1章人間が育つ家庭科 第2節生活をつくる4つの視点”. 主体的に生活をつくる—人間が育つ家庭科—. 渡辺彩子, 新井紀子編著. 学術図書出版社, 11-15.
- Winnicott, D. W. (1953). Transitional objects and transitional phenomena—a study of the first not-me possession. *International Journal of Psycho-analysis*. Vol. 34, 89-97.
- 全国社会福祉協議会 (2009). 機能面に着目した保育所の環境・空間に係る研究事業報告書. 独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成金事業, 17, 392.